

「18歳の君へ」

作：ヤン・ヨンヒ

語り：笑福亭鶴瓶

今 18歳の君に

70年前、18歳だった私の母の話を伝えたいと思う

太陽の匂いが気持ちいいと毎日布団を干していた母

ジーンズにまで糊付けしアイロンがけをしちゃっていた母

「スープを食べなさい」が口癖だった母

私の誕生日のたびに、年の数の薔薇を部屋に飾りつけてくれた母

大事に 大事に 育ててくれたのに

世間体を重んじる母が疎ましくなった

価値観やイデオロギーの違いから

「母のようにはなりたくない」と思った

それは、ちょうど私が18歳になったころから

たくさんの時間が過ぎ

老いた母の体が小さくなった

そして気づいたこと

それは

「私は母のことを何も知らない」という事実

母の家族や幼いころ、そして母の青春…

私は聞き始めた

「オモニ、なんで？ 何があったん？」

すると母は少しずつ 少しずつ 話し始めた

1945年、15歳だった母は 米軍の空襲を避け

両親の故郷である韓国・済州島へ疎開した

大阪弁しか知らなかった少女は

いきなり強烈な島の方言に包み込まれた

風と石と女が多いと言われる済州島で

大阪での暮らしが恋しかっただろうか

それとも 誰にも遠慮なく本名を使い

民族衣装を着られて

伸び伸びと幸せだっただろうか

若いころの母の写真は
広い額を見せて髪を引っ詰めた美人
「きっとモテただろうなあ」と思った

母には婚約者がいた
娘の私に打ち明けながら
「お父さんには内緒やで」
と釘を刺したのが可笑しかった
村の大きな木の下に、
座ってお喋りするだけのデート
「手を握る以上のことは何もなかったの」
と照れていた

母が18歳だった1948年
韓国・濟州島に大虐殺の嵐が吹き荒れた
婚約者とその家族も殺され
母は命がけで幼い妹を背中におぶり、
弟の手を引いて
幾重にも重なる死体や
血に染まった川の流れを見つめながら
30キロもの道をひたすら歩き
ようやく辿り着いた港から
船に乗って濟州島を脱出したのだという

その後日本に逃れ
父と出会い
そして私が生まれた

やっと知り始めた母の青春
これからもっともっと話を聞こうと思っていたのに
母はどんどん記憶をなくし子供へと戻っていく

私に「記憶する」ことを託したかのように
母は色々なことを忘れていく

少女のように絵本を見る母に代わって
私が「記憶」を刻んでいこうと思う

だから…
娘として 表現を「志」とする者として
昔 18歳だった母の話を

今 18歳の君に伝えたいと思う